

日本語教育ボランティアでの日本人大学生の気付き ——ウズベキスタン・スタディツアーにおける経験の事例から——

橋 本 卓*

**Noticing in Volunteer Activities to Teach Japanese Language by Japanese University Students:
A Case on Experiences through Uzbekistan Study Tour.**

Suguru Hashimoto*

キーワード：スタディツアー、ボランティア、日本語教育、国際理解教育

Keyword : study tour, volunteer activity, Japanese language education, education for international understanding

1. はじめに：

現在、ヒトやモノが世界中を活発に移動するようになった。特にヒトの移動は今までと異なる土地の人々との出会いを生み、互いの国・地域の文化の交流をもたらす。それ故、日本人にとって国内外で外国人と日本語で話したり、外国人に日本語を教えたり、日本文化を紹介したりする行為は身近なものになるであろう。それでは、専門家ではない日本人はこれらの行為をどのように捉えるのだろうか。また、これらの行為はどのような日本人に何をもたらすのだろうか。

筆者は2018年2月に明星大学の学生団体「BUKAS」の企画で行われたウズベキスタン・スタディツアーに参加した。この「BUKAS」は主に海外スタディツアーを企画・実施する団体で、その一部のメンバーが今回のツアーを実施した。このツアーの主な目的はウズベキスタンにある NORIKO 学級という日本語教育機関を訪問し、現地の日本語学習者に日本語を教えることであった。参加した日本人大学生は6名(3年生4名、2年生2名・女性5名、男性1名・明星大5名、他大1名※2018年2月時点)で、全員海外渡航経験者であった。その内、大学で日本語教育を学んだことがある学生は1名だった。

筆者と明星大学の教員1名は2018年2月13日(火)から24日(土)まで、大学生6名は2018年2月17日(土)から2月28日(水)までの間、ウズベキスタンに滞在していた。その内、NORIKO 学級での活動は2月19日(月)から22日(木)までであった。この4日間で日本語指導や日本文化紹介をボランティアで行なった。

本稿では今回のスタディツアーにおいて日本人大学生がボランティアで行った日本語教育活動を取り上げる。特に、その活動の企画から実施までの過程に注目し、そこから観察できた大学生の言動や感情を通して、大学生が得た経験を考察する。今回、これらのことを考察するために Ipad などの電子機器で記録したミーティング(打ち合わせ)時の音声データや、現地での活動の様子を記録した写真や動画などもデータとして用いる。

* 人文学部国際コミュニケーション学科特任講師
School of Humanities Department of International Studies Meisei University

2. NORIKO 学級での活動の概要：

2-1. NORIKO 学級：

NORIKO 学級はウズベキスタン共和国、フェルガナ地方のリシタンという町にある日本語教育機関である。1999年にエンジニアとして赴任していた日本人の大崎重勝氏とガニシエル校長とで開設され、現在ではリシタン・ジャパンセンターのサポートにより運営されている（地球の歩き方編集室, 2017, p210）。

ここでは無料で日本語指導が行われており、子供から青年まで幅広い年齢層の日本語学習者が通っている。日本語能力試験の上位レベルに合格したり、ウズベキスタン内の日本語スピーチコンテストでも優秀な成績を残したり、それから日本への留学を目指したりする学習者がいる。また、ここでは日本語を教えたり、日本文化を紹介したりするボランティアの受け入れも行っている（地球の歩き方編集室, 2017, p210）。

今回、ツアーに参加した大学生は NORIKO 学級の入門～初級レベルの日本語学習者に向けて、ボランティアで日本語指導や日本文化紹介を行った。

2-2. NORIKO 学級での日本人大学生による日本語教育活動：

次に2018年2月19日（月）から2月22日（木）までの間、NORIKO 学級において大学生が実施した日本語指導や日本文化紹介の内容を報告する。スケジュール及び主な活動内容は以下の表1の通りである。

表1. NORIKO 学級で行った主な日本語指導・日本文化紹介

日にち（曜日）	主な活動内容
2月19日（月）	日本語指導（自己紹介表現・あいさつ表現・ひらがな・数字） ※大学生は筆者の日本語指導にアシスタントとして参加
2月20日（火）	名札作り・日本語指導（単語：数字）＋ピンポン玉リレー 日本文化紹介（日本クイズ・明星大学紹介）
2月21日（水）	日本語指導（単語：動物）＋イラスト伝言ゲーム 日本語指導（単語・文型表現：道案内）
2月22日（木）	日本語指導（単語：動物・オノマトベ）＋動物バスケット 日本文化紹介（料理紹介：すいとん カレー風味）

ツアー実施日の2か月前ぐらいから日本語指導や日本文化紹介の企画・準備を始めた。大学生は事前に日本国内でミーティングを開き、現地の日本語学習者のニーズを確認し、日本語教育活動を計画していた。話し合いでは、日本語の勉強の楽しさを感じてもらうこと、日本語の習得、日本や日本語そのものに興味を持ってもらうことなどが教育活動の目的として挙がっていた。途中、筆者による日本語教育に関する簡単なレクチャーを挟み、ここで筆者が日本語教育における日本語学や指導法（特にゲームやコミュニケーション活動の紹介）を簡単に紹介した。ツアーに参加した大学生はこのレクチャーの内容も参考にして活動の企画や準備を進めていた。

2-3. 主な日本語指導の具体的な紹介：

ここでは日本人大学生が携わった日本語指導に関する活動を具体的に2つ紹介する。1つ目は2月19日（月）にアシスタントとして授業に参加し、携わった自己紹介表現、2つ目は2月22日（木）の大学生による日本語のオノマトベに関する指導である。

(1) 日本語指導（自己紹介表現）

日本人大学生は2月19日（月）筆者が担当する午後のクラスの授業にアシスタントとして参加した。このクラスには小さい子供から青年まで、日本語レベルも入門から初級（後半）までの日本語学習者が全部で20名程度出席していた。

まず、筆者はここで自己紹介表現「わたしは 名前 です。」を導入した。それから、口頭練習を行い、日本人大学生と現地の日本語学習者が交流できるようにコミュニケーション活動を行った。コミュニケーション活動のルールは以下の通りである。

◇ルール：

①まず日本人と現地の日本語学習者が入るようにグループを作る。

そして、グループで円を作るように立ち、グループの誰かがボールを持つ。

②スタートの合図でボールを持っている人が「わたしは 名前 です。」の文型表現で名前を言って、ボールを投げて、誰かに渡す。

③ボールを受け取った人は自分の名前を言って、ボールを誰かに投げて、渡す。

※②～③を繰り返す。

この活動の際、ツアーに参加した日本人大学生はみな笑顔でゆっくり大きい声で名前を言っていた。また、現地の日本語学習者の名前を覚えようと、聞いた名前を繰り返し言い、一人一人の名前を確認していた。

(2) 日本語指導（単語：動物・オノマトペ）＋動物バスケット

ツアーに参加した3名の大学生は2月22日（木）の午前のクラスの授業で35名程度の日本語学習者に日本語のオノマトペを教えた。目的は学習者に動物の鳴き声に関する日本語のオノマトペを学び、ウズベク語との相違を感じてもらい、より日本語に対する関心を持ってもらうことであった。

まず、大学生は日本の漫画に出てくるオノマトペや動物の鳴き声に関するオノマトペを紹介した。それから、動物の鳴き声をクラス全体でリピートし、学習者にオノマトペの音を体感させた。その後、動物の鳴き声を用いたフルーツバスケットを行なった。ルールは以下の通りである。

◇ルール：

①まず、椅子を円を描くように並べ、参加者を犬、馬、鶏の3つの組に分け、鬼以外は椅子に座る。

②スタートの合図で鬼は上の3つの動物のいずれかの鳴き声を言う。

③鬼が言った鳴き声の動物の組の人は立って、違う椅子に移動する。

④移動する際、椅子に座れなかった人が鬼になる。

※②～④を繰り返す。

最初は日本人大学生が鬼になった学習者をサポートするために、学習者の傍に行き、一緒に鳴き声を言っていた。それを他の参加者が聞いて、席を移動していた。その内学習者が3種類の鳴き声を覚え、自身で鳴き声を選び、言えるようになっていった。活動中は学習者も日本人大学生も笑顔で取り組んでいた。

3. 成果報告：

3-1. 日本語教育環境への参入：

ボランティアで日本語指導を企画、準備、実施してツアーに参加した日本人大学生はどのようなことを学

び、感じたのだろうか。NORIKO 学級での活動の様子や、現地の宿泊場所でのミーティング、帰国後の3月に行われた振り返りミーティングの際の学生の語りから、日本語指導が大学生にもたらした気付きを考察し、報告する。

今回、日本語指導の企画・準備を進めていくにあたって、日本人大学生は日本語教育環境をはっきり想像できずにいた。筆者が事前のレクチャーを設ける際に、日本語教育環境を簡単に説明したものの、その環境における日本語そのものやその話し方、日本語教育における指導法、教育者と学習者の関係をイメージするのに苦労していた。そのため、日本語指導における指導項目の決定や授業の組み立てが難航していた。

学生 A :

日本語ってめっちゃ難しいな。私、なんだろう、言葉をというよりは、あくまで自分が、自分が考えたり、コミュニケーションとしての手段としてしか捉えてこなかったから。それをじゃあ教えようってなったときに、あれ自分ってどうやってしゃべってたっけとかそういうふうに考えられて… (省略)

3月6日(火) 振り返りミーティングにて

学生 A :

私、日本語を学ぶ人たちに会ったこともあんまなかったし、だからそもそもどういう空気感とか、どういうテンションでやるんだろうという部分が全く見えないままで、相手のレベルもまったくわからないままで、授業を組み立て始めたからなんか目的ってなんだろうってどこでけっこう躓いていた。

3月6日(火) 振り返りミーティングにて

この語りから、日本人大学生は普段の生活で日本語教育の現場や日本語での外国人とのコミュニケーションに遭遇する機会がそれほどないと思われる。それ故、日本語学習者や日本語非母語話者と触れ合う機会もなく、その人達に合わせた日本語やその人達の日本語学習を把握することもできず、指導計画に躓いていたと言える。

そうした中で2月19日(月)に筆者の日本語の授業にアシスタントとして参加したことは、日本人大学生にとって日本語教育環境を理解するきっかけとなった。

学生 A :

あ、こんなゆっくりなテンポでしゃべるんだあ、こういう身振り手振りをずっとするんだとか、あ、ゲームのときはこれぐらいの距離感で意外と見るんだ。それは相手によっても変わるんだろうと思うんですけど。

3月6日(火) 振り返りミーティングにて

このように、この19日(月)の日本語の授業への参加で、ツアーに参加した大学生は日本語学習者(日本語非母語話者)のための日本語の話し方や日本語指導における教育者の立ち振る舞いなど一つ一つ認知することができた。この日本語教育環境との出会いは日本語を指導するということはどういうことなのか、日本語母語話者と非母語話者との相違はどのようなものなのか、そしてボランティアとして何ができるのかをイメージするきっかけになったと考えられる。

3-2. 日本語学習者(日本語非母語話者)のための日本語 :

2月19日(月)にアシスタントとして授業に参加した結果、日本人大学生は日本語学習者(日本語非母語話者)のための日本語を意識するようになっていた。その意識の芽生えは、19日(月)の授業の終了後、クラス全体に向けて行った日本語での自己紹介に表れていた。以下の発話は日本人大学生が現地の日本語学習者

に自己紹介したものである。

学生 B：

私の V 名前は V 学生 B の名前 V です。(現地の日本語学習者が B の名前を繰り返す) 私の名前は 学生 B の名前 です。私は V 大学 V (2 のジェスチャーをしながら) 2 年生で、(20 のジェスチャーをしながら) 20 歳です。はい。よろしくお願いします。

※ V = ポーズ (一時停止)

2 月 19 日 (月) 午後の日本語クラスにて

学生 B は現地の日本語学習者が聞き取れるように短文でいくつかの情報をゆっくり大きい声で話していた。また、いくつかの箇所でポーズ (一時停止) を行い、数字などは手によるジェスチャーで伝えようと工夫していた。他の学生も学生 B のように、日本語母語話者と非母語話者との間に存在する日本語能力の差を配慮し、日本語をコントロールしながら自己紹介を行っていた。

大学生は日本語非母語話者とのコミュニケーションを促進するために語彙や文法の調整やジェスチャーの使用など「やさしい日本語」や「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」(野田, 2014) が必要だと気付いたと言える。このような日本語による表現の工夫は 20 日 (火) 以降の日本語指導でも窺えた。

3-3. 日本語という文化を共有する喜び：

2 月 20 日 (火) からは日本人大学生が自分たちで企画した日本語指導を実際に行っていた。大学生は現場で苦労しながらも、学習者が真剣に学び、指導した言語知識を使用する姿を間の当たりにして、日本語指導に対する達成感を感じていた。

学生 B：

(学生 A が指導項目を確認する) あ、そうそうそう道案内。なるべくその子ども達がいんな力がつけられるように話すだけでなく聞くのと、読むのとして話す身につけられるように組み立てたんですけど、一人でやるのがすごい大変だったなあと、なんかいろいろ準備とかどうすればいいだろうこっちは自分もわからないからいっばいいいばいになりすぎて自分のことで精一杯で、精一杯でした。で実際にやってみて、難易度すごく違うなってなかなか下のレベルの子たちはついていけないというふうにやってる途中もかんじたんですけど… (省略) …自分としては楽しくできたなあというふうにと思っています。なんかできない子、できない子なりに、こうできる子に教えてもらいながら、なんか頑張ってこう教えた文法を使おうとしてくれてるっていう様子^(ママ)が、やっている間に伝わってきたのがすごくうれしくて、なかなかちょっと無理難題だっているこどもたちにはっていう文法だったんですけど、ゲーム要素ちょっと取り入れたらしたので、それがいい方向にちょっとしてくれたのかな… (省略) …

3 月 6 日 (火) 振り返りミーティングにて

学生 A：

午前中クラス、目的は何、日本語を学ぶとかじゃなくて日本語にをもっと楽しいと思ってもらおうとかあ、こんな日本語あるんだっていう興味を持たせるというところだったからじゃそこでプロじゃない私たちが行って何できるっていうオノマトペっていうアプローチ？それはある意味新しかったらうなと思って。なんか『みんなの日本語』見てもそこだけの授業とかは絶対ないし… (省略) …そのアプローチ方法もある意味うちら独自のものだったからなんかよかったのかなって、… (省略) …授業通して終わった後に (学生 A の名前) さん、(学生 A の名前) 先生ここ来てとか一緒にサッカーしようよと

か向こうからすごい声をかけて来てくれるきっかけになった、その授業が。でなんか私その時にあ、なんかこれでよかったんだなって思った。この授業の目的は日本語に興味を持つことだしっていうのでそこに絞ってやってきたことだから…（省略）…私その後になんかそのちびっこたちと…（省略）…わーわー（学生Aの名前）さん（学生Aの名前）さんって話し手いるときもふざけて「わんわん、わんわん」とか、そういうのを会話言ってたとか。それはその子だけかもしれないけど、なんか、そういうなんか、向こうの子にとっても新しい知識、辞書には載っていないことをなんか伝えられたっていう意味ではそれがすごいよかったのかなって思って…（省略）… 3月6日（火） 振り返りミーティングにて

21日（水）の午後クラスで道案内の場面に関する日本語を指導した学生Bは日本人がウズベキスタンに来た時に案内できるようにという目標を念頭におき、指導案を計画していた。筆者の所に何度か個別に相談に来ており、道案内に用いる単語や文型表現を楽しく、わかりやすく教える方法を考えていた。その際、学生Bは指導する単語や文型表現を取捨選択や定着させるための学習活動の計画に悩んでおり、日本語を教える難しさを実感していた。

筆者は他のクラスで授業を実施しており、実際に学生Bが指導する姿は見られなかった。ただ、このミーティングでの体験談から、クラスにおける学習者の日本語能力レベルの格差に戸惑いながらも、指導した日本語を用いて、活動に取り組む学習者の姿を見て、喜びを感じていたことがわかった。

一方、22日の午前中にオノマトペの指導を担当していた学生Aは指導日の前日、筆者と他の担当者を交え、夜遅くまで指導案について話し合っていた。特に学習者に楽しく日本語のオノマトペを学び、日本語により興味を持ってもらうための効果的な指導法を探していた。そこで、提案されたのが「動物バスケット：動物の鳴き声を用いたフルーツバスケット」であった。

指導日当日、学生Aは他の担当者と現地の学習者がしっかりオノマトペを覚えようと練習し、覚えた表現を用いて「動物バスケット」に楽しく参加している姿を見ていた。そして、大学生もこの活動に参加し、その場の楽しさを十分に共有していた。また、学生Aは授業後の現地の学習者との会話の中で指導した表現を使用する場面にも遭遇していた。

確かに日本語教育の知識をそれほど持たない大学生にとって実際の日本語指導は難しいものであると言える。ただ同時に、大学生は日本語という自国の文化を振り返り、指導計画に苦労しながらも、実際の指導の中で現地の日本語学習者と日本語という自国の文化が共有される場面に出会うことで、喜びを感じていた。この現地の人々と自国の文化を共有する喜びは、大学生にとってより自国の文化の価値を再考するきっかけとなるかもしれない。さらに、日本語が共有され、母語話者・非母語話者を問わず同じ活動に取り組んだ経験はこれからの国際社会での共生の姿を理解するきっかけになったのではないだろうか。

4. まとめ：

本稿では2018年2月に明星大学の学生団体「BUKAS」で実施されたウズベキスタン・スタディツアーで日本人大学生がボランティアで行った日本語教育活動を取り上げ、大学生が得た経験やその経験からの大学生の気づきを検討してきた。

日本国内外で日本語学習者や日本語非母語話者との接触がそれほど多くなく、日本語教育に関する知識もほとんどない日本人大学生にとっては日本語の指導は難しいものであった。しかし、ウズベキスタンの共和国のNORIKO学級を訪問し、日本語を指導するという経験は大学生にいくつかの気づきをもたらした。

一つ目の気づきは「日本語学習者（日本語非母語話者）のための日本語」である。日本人大学生はNORIKO学級を訪問し、日本語学習者（日本語非母語話者）に出会い、その社会の中で使われる日本語の姿を認識していた。その結果、大学生は現地の日本語学習者と日本語で会話する際、コミュニケーションの促

進のために、日本語の難易度や話すスピードの調整など「やさしい日本語」や「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」(野田, 2014)を意識し、実践していた。

もう一つは「日本語という文化を共有する喜び」である。日本人大学生は戸惑いを感じながらも、日本語の言語知識をもう一度振り返り、日本語の指導を計画し、実施した。大学生は指導した言葉を覚えようと努力する様子を目の当たりにし、そして共有された日本語と一緒に活動に取り組む体験を経て、日本語で人とつながる喜びを覚えていたと言える。

これから日本国外でも日本の魅力に気づき、日本語や日本文化に興味を持つ人も増えるだろう。また、2020年の東京オリンピック、そして外国人雇用や国際結婚などによって国内でも外国人の滞在者や定住者が増加し、日本語学習者や日本語非母語話者に会うことが多くなると考えられる。そのような人に出会い、交流する際、私たち日本人はどうすればいいのだろうか。

確かに日本語教育の知識の有無の関係で最初は躓くかもしれない。ただ、諦めずに日本語学習者や日本語非母語話者に歩み寄り、日本語を調整・共有しながら、コミュニケーションを少しずつ作り上げていけばいいと思う。そのようにすれば、本稿で挙げた大学生のように、日本語で人と繋がることができるだろう。

参考文献

- 地球の歩き方編集室(2017)『地球の歩き方 中央アジア サマルカンドとシルクロードの国々 2017～2018年版』, ダイヤモンド・ビッグ社
- 野田尚史(2014)『『やさしい日本語』から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へ—母語話者が日本語を使う問題として—』『日本語教育』158, 4-18.
- 藤原孝章・栗山丈弘(2014)「スタディツアーにおけるプログラムづくり - 『歩く旅』から『学ぶ旅』への転換 -」『国際理解教育』20, 42-50.